

# Hospital Report

## 市立四日市病院 消化器科



【住 所】三重県四日市市芝田2丁目2番地37

【病院事業管理者 兼 院長】伊藤 八峯 先生

【病 床 数】568床

【スタッフ】医師 7名、看護師 4名(内視鏡技師 2名)

【内視鏡検査・治療総数】(平成19年度)5,317件(上部消化管3,146件、下部消化管 1,350件、ERCP 186件、ESD53件、他)

【保有内視鏡総数】上部用 13本、下部用 7本、超音波内視鏡 1本、十二指腸スコープ 2本、小腸用スコープ 1本

## 地域最大の急性期病院として 患者本位の医療サービスを追求

### 併設の救急センター『ER-YOKKAICHI』と連携し 緊急内視鏡にも24時間体制で対応

市立四日市病院は、三重県北勢地方の人口83万人を医療圏とし、地域の中核都市である四日市市最大の急性期病院として発展してきました。同院は救急医療センター『ER-YOKKAICHI』を併設し、入院治療が必要な重症救急患者に対して24時間体制で2次救急医療を提供しており、地域の最大病院として年間約3万人の救急患者を受け入れています。

消化器科でも吐血に対する止血術等の緊急内視鏡の件数が多く、医師は24時間オンコール体制で治療にあたっています。消化器科副部長の小林真先生は、「当院ではERのスタッフが基本的な内視鏡の介助を行えるので、我々が病院に到着するまでには一時処置はもちろん必要な機器類の準備まで完了しており、内視鏡医はその後の手技に安心して集中することができます」と、ERとの連携により安全で確実な治療が実現している点を強調されました。

### 医療の質のさらなる向上を目指し 既存の枠にとらわれない創意工夫を実践



消化器科 副部長  
小林 真 先生

消化器科では侵襲性の低い患者本位の医療を実践するため、ESDや胆膵内視鏡治療などに代表される高度な治療内視鏡にも早くから取り組んでいます。特に同院では地域的に総胆管結石の症例が多いのが特徴ですが、現在ではほとんどの症例で内視鏡的に排石しているそうです。この結石除去の方法について、小林先生は最近、カニューレシ

ョンから十二指腸乳頭切開までをニードルナイフで行う、新しいプレカット法(写真1)を用い、良好な成績を収められています。このように、消化器科では従来の治療方法や処置具に満足することなく、新しいアプローチやデバイスの改良について積極的に研究や工夫を重ねることが現場に根付いています。このエネルギーが実を結び、最近では小林先生のアイデアによるESDのデバイスが実際に製品化されているそうです。 .....

Boston  
Scientific

Delivering what's next.™

## ニードルナイフによる十二指腸乳頭プレカット法

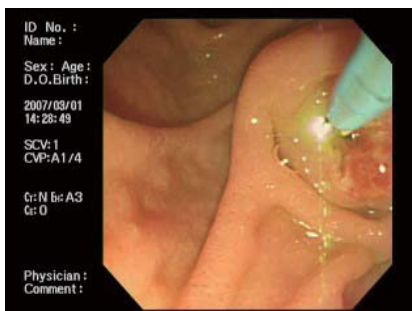


写真1:プレカット法による結石除去

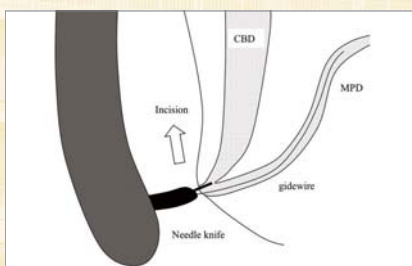


図1

図1:RX Needleknife XL(Boston Scientific製)を用い、ガイドワイヤールーメンから0.035"または0.025"のガイドワイヤーを膵管に挿入して十二指腸乳頭を長軸方向に安定させる。そのまま共通管内にニードルナイフを挿入し、胆管方向へ切開を加える。ニードルナイフはナイフ径が0.18mmと細いため、膵実質に熱変性が及びにくい。また、膵管内に留置したガイドワイヤーにより、乳頭とニードルナイフの距離が一定に保たれ、呼吸性変動や消化管の蠕動に影響されずに安定した切開を行える。(小林 真 先生)

## 豊富な症例と手厚い研修体制で次世代を担う真の医療人を育成

同院は臨床研修指定病院として毎年10名以上もの多くの研修医を受け入れています。平成15年からは厚生労働省のカリキュラムに準拠したプライマリケア重視の「スーパーローテーション方式」をとり、豊富な症例数と手厚い教育体制で幅広い経験と知識を蓄えられる環境を整えています。消化器科でも研修医の教育には力を入れており、消化器科医長の山田晋太郎先生は、「研修医には内視鏡に興味をもってもらうよう、上部と下部の内視鏡操作、造影目的のカニキュレーションまでは体験してもらいます。4名の指導医が8週間の研修期間をほぼマンツーマンでつくるので、不安や疑問があってもその場で解消できるような体制になっています」とご説明されました。

内視鏡室はER・検査部門に含まれており、業務を行う看護師は固定ではなく、IVRと合わせて13名の看護師がローテーションで配置されます。多忙の際には配置の人数を増やせるというメリットはありますが、反面どのスタッフが配置されても良いよう、均一な情報の共有と介助技術が必要とされます。そのため、医師との連絡事項の共有については申し送りノートを作成し、13名の看護師全員に随時伝達されるようになっているそうです。新人スタッフの教育についてER・検査部門副師長の高森容子さんに伺ったところ、「始めの1ヶ月は先輩看護師がマンツーマンでつき、新人教育カリキュラムを用いておよそ半年間、独り立ちできるまで指導しています」とお話をいただきました。



消化器科医長  
山田 晋太郎 先生



消化器センターのみなさん  
(後列右から3番目が高森容子ER・検査部門副師長)